

【高松キャンパス】……………

読書感想文		
優秀賞	電気情報工学科3年	武田 慎吾
優秀賞	1年4組	久米 篤司
佳作	電気情報工学科4年	阿河 克明
佳作	建設環境工学科2年	小田 菜月
千頁読破記		
優秀賞	建設環境工学科4年	紙本四季子
優秀賞	機械電子工学科2年	谷川 豊章
佳作	電気情報工学科3年	岡本真由子
佳作	建設環境工学科3年	景政 柊蘭
夏休み体験文		
優秀賞	電気情報工学科3年	山田季美佳

佳作	機械工学科4年	上村 一樹
佳作	機械工学科4年	津村 碧依
佳作	電気情報工学科2年	寺本 早希
佳作	建設環境工学科2年	山本 果歩
佳作	1年2組	荒駒 大地

【詫間キャンパス】……………

読書感想文		
最優秀賞	情報工学科2年	安藤 翼
優秀賞	1年5組	勝田 稚菜
優秀賞	電子システム工学科3年	藤井 秀里
佳作	専攻科2年	高津 朋裕
佳作	情報工学科3年	矢野友加里

講評

高松キャンパス
一般教育科 長谷川 隆



毎年、1年生から4年生に夏休み課題文を課しています。国語科の恒例の課題です、夏休み体験文、読書感想文、千頁読破記の中から各自が自由に1つを選び、提出するというもので、5年生以上にも提出を認めていますが、残念ながら今回はありませんでした。計588編になりました。昨年度より10編多く相当の数になります。これらの中からどのように入賞作品を選ぶのでしょうか。

まず、私を含めた高松キャンパス国語科教員3名で分担して課題文を読み、それぞれ20編程度までに絞ります。その後、国語科で選考会議を開き、入賞候補作品を選びます。最終選考は、夏休み課題文は学生主事が、読書感想文と千頁読破記は図書館小委員会が行い、優秀賞、佳作を決めます。

長年、このように選考をしていて、どのような作品が入賞するのか、そのコツのようなものがわかってきました。今回はこのことを中心に講評しましょう。

読書感想文においては、何よりも作品と書き手との間に「戦い」がなければなりません。作品に圧倒されて、あらずと、すばらしかった、面白かったと書くだけでは面白くないのです。また、作品をろくに読まず、自分勝手な感想を書いてはよくありません。読書によって書き手が成長してほしいのです。

武田慎吾君の「裁判について」は、公民の授業で死刑制度の話があり、裁判に興味を持って読んだ本の感想です。裁判における「判断」の基準が今まで自分が思い込んでいたものと違うことに対する驚きが文章の根底にありました。久米篤志君の「数学Iを読んで」は、普通、読書感想文の対象にしない数学Iの教科書を対象にしたところに、ユニークさがあります。誰でも太宰治の「走れメロス」と「数学I」とを比べようとは思わないでしょう。

毎年、千頁読破記を読んで感じることは物足りなさでした。字数を1000字以上にしてはいますが、400字詰原稿用紙3枚程度では正直物足りません。「1000字以上」の「以上」に注目してください。字数に上限はないのです。2000字の千頁読破記を書けば、それだけで入賞候補になります。紙本四季子さんの「技術者にとって大切なこととは何か。」は2000字を超えています。内容もテーマを決めてしっかり書かれています。谷川豊章君の千頁読破記は字数1000字強ですが、内容がまとまっています。最初に「僕は、英語が好きだ。」とあります。このように最初に書きたいことを書くと、文章がしまります。

最後に夏休み体験文についても書いておきます。山田季美佳さんの「体験することで学ぶこと」を優秀賞にしていますが、アジアの学生の高専体験プログラムに参加したことが書かれています。体験文では何を「体験」するかがきわめて重要です。書きたくなることを体験したらしめたものです。後は、それをいかにうまく料理するか(文章にするか)だけです。

詫間キャンパス
一般教育科 富士原 伸弘



平成25年度の読書感想文コンクールは276編の応募を得た。その中から最優秀に安藤翼「『ホテル・ルワンダの男』を読んで」、優秀に勝田稚菜「科学者 レイチェル・カーソン」・藤井秀里「ヒマワリにひそむふしぎな数列」、佳作に高津朋裕「“音楽”が、一段と好きになりました。」・矢野友加里「『ふがいない僕は空を見た』を読んで」が選ばれた。最優秀の「『ホテル・ルワンダの男』を読んで」は、2004年に米国で映画化され、2006年には日本でも上映された、映画『ホテル・ルワンダ』の主人公でもあるポール・ルセサバギナの自伝を読了しての感想が述べられている。「ルワンダの虐殺」という大変に重い歴史的事件に触れ、自身の高ぶる気持ちを冷静かつ正確に表現しようとする姿勢が伝わってくる内容となっており、多くの審査員から高い評価を得た。優秀

の「科学者 レイチェル・カーソン」は、筆者のレイチェル・カーソンへのあこがれを素直に書き表した好編。「ヒマワりにひそむふしぎな数列」は、自然界の中で発見される数列の不思議に触発され、自然界の不思議と技術開発との関連にまで思いをめぐらせた力作である。佳作の「“音楽”が、一段と好きになりました。」は、やや饒舌になりすぎた文章ではあるが、音楽に取り組む難しさと楽しさを感じさせる一編。「『ふがいない僕は空を見た』を読んで」は、映画化もされた話題の小説に挑んだ労作。「理解できない世界」・「共感できない登場人物」の小説を苦心しながら読み解こうとす

る、筆者の努力の跡が伺える。

25年度の読書感想文コンクールを終えて、「読書感想文」とは何かを改めて考えてみる必要性を感じた。ただあらずじを書くのではない。本の内容から離れて、自分の考えを主張するものでもない。エッセイとも違う。読書によって何を感じ、どこに共感し、自分の生活にどのような変化が生まれたのか。「読書」によって生じた自分の「感想」を、他人に読んでもらう「文」章にしなければならない。次年度の読書感想文コンクールに期待したい。

入賞作品紹介

〈高松キャンパス 読書感想文〉

優秀賞

裁判について

電気情報工学科3年 武田 慎吾

三年生での公民の授業の中で、「あなたは死刑制度に賛成か反対か。」という問いに挙手して答える事があった。クラスでは賛成派が多く、僕もその一人であった。

夏休みに入り、書店で本を見ていると1冊の本の帯に、「死刑か無期懲役か何があなたの判断を分けるのか」と書かれていた。それを見て授業での問いを思い出してその本を読み始めるに至った。

読み始めると先ずこれまでの裁判に於ける死刑基準が明かされる。と同時に、*1「人命は最高の価値であるとしても、そのこと自体は死刑判断には役立たない。」と書かれている。人を殺したものは死なねばならない、という事が必ずしも成り立っていない事は承知の上であったがこの言葉に僕は驚かされた。命を奪う罪を犯した者は自らの命を奪われるべきではないか、という一つの意見を言い切って否定したと感じたからである。また同時に、ならば死刑とはどんな価値尺度によって決められ行われるのかと興味が湧いた。

読んでいくにつれ、死刑を決める為にどのような観点で見るとすべきかを知っていく。しかし乍ら、この観点は増えていくだけでなく、当たり前ではあるが全てを考慮する必要がある。

僕ははっきり言って、それら全てを網羅した上で人に科すべき刑を導き出す事は難しいと思う。また、皆が等しく人を裁く側の一部となり得る現在の社会でも、その様な知識を皆が皆持っているだろうかという疑問も持っている。

僕は知っている身の回りの人が裁判員に選ばれた、という話を聞いた事はなく、未だに制度が施行されている、という強い実感は持った事が無い。そんな僕でも将来もしかすると裁判員に選ばれる事があるかも知れない。その意味は、市民感覚を幾らか議論の中に取り入れる、という事もあるだろ

うと思う。但し、考えるべき観点の重要性を認識していないと考慮すべき所の抜け落ちに判断をしかねないのではないのか。

これらはきっと職業裁判官や裁判所の方が教えてくれ、また、その義務があると思っている。中には裁判中に受ける説明の理解度が低かったと感じる人も居た様である。選ばれる人の能力は抽選時に鑑みられない為、普段から教育機関で少しでも裁判について触れたりして、基礎知識程度は判例を学ぶべきだと思う。人が死んでいるレベルの裁判を扱ったりするのであるから、という理由も含めて。

只、自分が読んだ事を多くの人が知識の一部として持てば良いとは思うものの、その事自体が、判断の正しさの向上等に即繋がる訳では無いと思う。鑑みるべき事象が多い程、それら一つ一つで最適な選択をとり続けていく事は難しいのだから。

それでも、自分の様に、例えば死刑制度に賛成か反対かと聞かれた事があり、後になって自分の考えや認識等が浅薄であったと振り返る人が居るならば是非、教育内容に盛り込んで欲しいと思う。きっと、制度の目的の一つである司法に対する国民の信頼向上に繋がるであろう。

筆者によると、裁判の判決についても、一定の基準(または法則)が変化した事があるらしい。例えば親族間殺人が死刑とならず、無期懲役と判決される様に裁判所は変わったと言い、根拠となる判例も挙げられている。他にも裁判員裁判となってから、選ばれる刑の内容が変化している事例があるとしている。

人々の考え方の風潮や流行の様なものによって判決が変わっている。と書くともマイナスな言い方ではあるが僕はそういうものであり、それでいいと思っている。昔用いられていた「古い」基準や考え方も未来で少し形を変えて「新しい」又は「ベターな」ものとしてまかり通るかも知れないのが死刑制度や倫理問題なのだと僕は考えている。これらの問題への答えは無限にあるのだ。

「考えても答えは無い」と半ば諦めた姿勢で問いに望むのもある意味間違いでは無いのだから。それでも当然、社会の一部として存在し、その恩恵を受けている以上、それらに関わる事が出来るにしろ出来ないにしろ社会の抱える問題や疑問について考える力と出来るなら各々が答えを用意すべきだと思う。実際にはその様な事をせずとも社会は維

持されるだろうし、僕などは、「今、日本が抱える問題は何か。」と問われても多くを挙げたり、ましてやそれぞれについてしっかりとした意見を述べる事など出来ないであろう。それでも一生を楽しく過ごす事だって可能だろう。それでも考えるべき事は考えねばならないと思う。裁判、元を言えば死刑制度についての思考は、この中の一つに含まれる。

僕はこの本を読んで、死刑制度についての知識を得、知識を持った上で考え続けねばならない事に向き合うべきという心構えの様なものを持つたと思う。社会人として、社会を構成するものの最小部品として生きていく為の責任の一つとは、これを自覚する事ではないかと思う。勿論、最低ラインなどでは無く理想を語る上での社会人像の一要素ではあるだろうが。

僕は、盲目で浅ましいものだとは思いますが、自分の祖国である日本を誇りに思っている。その中の見えない程小さいピースである自分や他の人々が自覚を持って問題に向き合う、誇るべき社会を作っていって欲しいと思うし、これから、僅か乍らでも、その意識を持って努力していきたい。

注) *1 23P

『死刑と正義』 森 炎 講談社 (講談社現代新書)

優秀賞

数学Iを読んで

1年4組 久米 篤司

「興味のある人は数学や物理の教科書を読んで読書感想文を書いてみてください」 その言葉を聞いて僕は驚きとともに好奇心が心の底から湧いてきました。

まず最初に思った事は「数学や物理の教科書の感想文なんてどういう風を書くのだろう」という事です。しかし後々から「挑戦してみたい」という気持ちが強くなり、数学Iの教科書で読書感想文を書く事を決めました。

いつもは、数学Iの教科書の隣はノートや参考書ですが今日は原稿用紙です。

教科書を開いて見ますが、そこにはいつものようにxやy、 $\sqrt{}$ やsinなどが並んでいるばかりです。

僕は「そもそもなぜ数学や物理は国語などの教科書と比べて感想文にしにくいのか」という事を考えてみました。

だれもが知っている太宰治の走れメロスの文頭である「メロスは激怒した。」と「 $1+1=2$ 」という国語分野と数学分野で分けて比べてみました。「 $1+1=2$ 」は「数上で1という量と1という量の合計は2という量になる」と文に書き直す事もできるので、「メロスは激怒した。」も「 $1+1=2$ 」もどちらも肯定文である事には変わりありません。

しかし、走れメロスを知らない人が「メロスは激怒した。」という文を見るとどうでしょう。「メロスってなんだ?」「なぜ、激怒したんだ?」と考えたり「メロスは人間であり男だろう。」「激怒させた人がいるのだろう。」と想像することができます。

一方「1ってなんだ?」「なぜ $1+1$ が2なんだ?」と考えても数上の1という量と決められており、合計が2という量と肯

定されているので「 $1+1=2$ 」は考えたり、想像する事が制限されてきます。

読書感想文などを書く時、考えや想像が多ければ多いほど書きやすいので、あきらかに数学分野より国語分野の方が有利な事が分かりました。

さっき僕は数学分野での考えや想像は「制限される」と表現しました。つまり、不可能ではないのです。今自分が書いている感想文のように書く上での思った事も書けば感想文にもなります。

また、ちょっと強引ですがさっきの「 $1+1=2$ 」を「りんご1個とりんご1個を合わせるとりんご2個」と対象物を変えて想像する事もできます。つまり、メロスはメロスではなく、太郎でも久米でもいいわけです。でも、「 $1\times 2=2$ 」「メロスは涙した」などとは変えて想像してはいけません。そうすると文自体の意味が変わってくるからです。また、「なぜ $1+1=2$ なんだ?」と考えてもいけません、すると「なぜ太宰治はメロスは激怒したと書いたんだ?」となりどちらも文が示す意味を履き違えてしまうからです。

以下のことをふまえて、三角比の相互関係である $\tan A = \frac{\sin A}{\cos A}$

を想像して書くと「 $\angle C$ が直角である三角形ABCがあり線分BCの長さをa、線分ACの長さをb、線分ABの長さをcとする。そしてaをcで割った数をラテン語の意味で曲がった表面、英語ではくぼみ、穴という意味のsinに $\angle A$ を基準にする事の意味も込めてsinAをおきます。また、bをcで割ったものを英語で補足して完全にするものという意味でcosAとおきます。最後にaをbで割り、ラテン語で触る、接するという意味のtanAを置きます。なぜsinA、cosA、tanAと書くのはその文字の意味にのっっていると分かりました。ラテン語や英語だけではなく日本語でもsinAを正弦といい、cosAを余弦、tanAを正接といい、日本語でも意味にのっって由来している事が分かりました。

数学ではほかにも意味にのっった文字があります。いや、ほとんどの文字や記号が意味があったり、人の名前から由来したりと適当に決めていません。僕が思ったのは日本語の漢字とよく似ているなあとという事です。漢字も数学の教科書などと同じで感想文を書きにくいところが似ています。もしかしたら、漢字が一番感想文が書きにくいかもしれません。

最後に僕がこの感想文を書いている時に心に思った事があります。それは、「この教科書は世界に一つしかないけど、この本に載っている内容は全世界のほとんどが知っていて、池上彰さんやイチロー、AKBなどの有名人から歴史上の人物までもがこの三角比の内容などを習ったのか。」という事です。ギリシャのトレミーが紀元前百五十年に三角比を発見してからの事です。そんな歴史のある内容がつまった本を私はもっと大事にして、もっとそういう事を考えた上で勉強するべきだと思います。

やっぱり数学の教科書で読書感想文を書く事はとても難しかったです。ほとんどが説明文で感想が少なかったです。けど、自分にとって数学や物理の教科書で感想文を書くという今までにない発想が新鮮な刺激でいい経験になりました。